



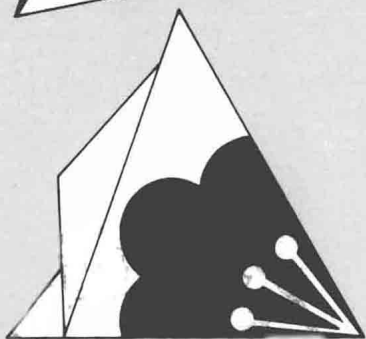
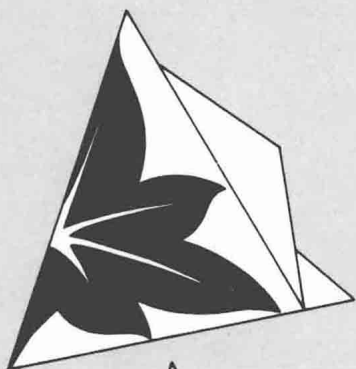
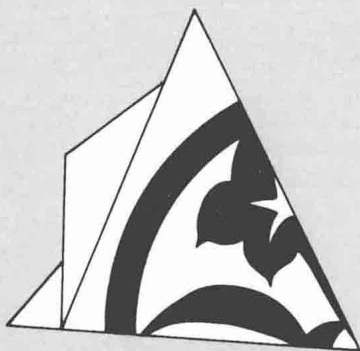
花小説・戯曲選



第七卷



岩波書店



鏡花小説・戯曲選 第七卷

第三回配本(全十二巻)

一九八一年八月二五日 第一刷発行

定価 三五〇〇円

著 者 泉 鏡 太 郎

発 行 者 緑 川 亨

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五
電話 〇三二六千四二二
振替 東京六二六二四〇

印刷・三陽社 製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

歌行燈	一
五大力	八五
白金之繪圖	一九九
朝湯	二五三
卵塔場の天女	三三三
木の子說法	四三七
解説	村松定孝 四九三

歌 行 燈

宮重大根のふとしく立てし宮柱は、ふろふきの熱田の神のみそなはす、七里のわたし浪ゆたかにして、來往の渡船難なく桑名につきたる悦びのあまり……

と口誦むやうに獨言の、膝栗毛五編の上の讀初め、霜月十日あまりの初夜。中空は冴切つて、星が水垢離取りさうな月明に、踏切の棧橋を渡る影高く、灯ちら／＼と目の下に、遠近の樹立の骨ばかりなのを視めながら、桑名の停車場へ下りた旅客がある。

月の影には相應しい、眞黒な外套の、瘦せた身體に些と廣過ぎるを緩く着て、焦茶色の中折帽、眞新しいは扱て可いが、馴れない天窓に山を立てて、鐙をしつくりと耳へ被さるばかり深く嵌めた、剩へ、風に取りられまいための留紐を、ぶらりと薙びた頬へ下げた工合が、時世なれば、道中、笠も載せられず、と斷念めた風に見える。年配六十二三の、氣ばかり若い彌次郎兵衛。

然まで重荷ではないさうで、唐草模様の天鵝絨の革靴に信玄袋を引揃めて、這個を片手。片手に蝙蝠傘を支きながら、

「さて……悦びのあまり名物の焼蛤に酒汲みかはして、……と本文にある處さ、旅籠屋へ着の前に、停車場前の茶店が何かで、一本傾けて参らうかな。(何うだ、喜多八。〇)と行きたいが、其許は年上で、些とそりが合はぬ。だがね、家元の彌次郎兵衛どの事も、伊勢路では、これ、同伴の喜多八にはぐれて、一人旅のとぼくと、棚からぶら下つた宿屋を尋ねめぐんで、泣きさうに成つたとあるです。處で其許は、道中松並木で出来た道づれの格だ。其の道づれと、何んと一口遣らうではないか、え、捻平さん。」

「また、言ふわ。」

と苦い顔を澁くした、同伴の老人は、まだ、其の上を四つ五つで、やがて七十なるべし。鰐虎皮の鰐なし古帽子を、白い眉尖深々と被つて、鼠の羅紗の道行着た、股引を太く白足袋の雪駄穿。色褪せた鬱金の風呂敷、真中を紐で結へた包を、西行背負に胸で結んで、これも信玄袋を手につ。片手に杖は支いたけれども、足腰はしやんとした、人柄の可いお爺様。

「其の捻平は止しにさつしやい、人聞きが悪うて成らん。道づれは可けれども、道中松並木で出来たと言ふで、何とやら、其の、私が護摩の灰でもあるやうに聞えるぢや。」と杖を一つ丁と支くと、後の雁が前に成つて、改札口を早々と出る。

故と一足後へ開いて、隠居が意見に急ぐやうな、連の後姿をじろりと見ながら、

「それ、其處が其れ捻平さね。松並木で出来たと云つて、何もごまのはひには限るまい。尤も若い内は遣つたかも知れんてな。は、は、」

人も無げに笑ふ手から、引手繰るやうに切符を取られて、はつと驛夫の顔を見て、きよとんと生眞面目。

成程、此の小父者が改札口を出た殿で、何をふら／＼道草したか、汽車は最う遠くの方で、名物焼蛤の白い煙を、夢のやうに月下に吐いて、眞蒼な野路を光つて通る。……

「やがて爰を立出で辿り行くほどに、旅人の唄ふを聞けば、」

と小父者、出た處で、けろりとして又口誦んで、

「捻平さん、可い文句だ、これさ。……」

時雨蛤みやげにさんせ

宮のおかめが、……ヤレコリヤ、よろしよし。」

「旦那、お供は何うで、」

と停車場前の夜の限に、四五臺朦朧と寂しく並んだ車の中から、車夫が一人、腕組みをして、のつそり出る。

これを聞くと彌次郎兵衛、口を捻ぢて片頬笑み、

「難有え、圖星と云ふ處へ出て來たぜ。が、同じ事を、これ、（旦那衆戻り馬乗らんせんか、）と何故言はぬ。」

「へい、」と言つたが、車夫は變哲もない顔色で、其のまゝ棒立。

二

小父者は外套の袖をふら／＼と、酔つたやうな風附で、

「遣れよ、さあ、（戻馬乗らんせんか、）と、後生だから一つ氣取つてくれ。」

「へい、（戻馬乗らんせんか、）と言ふでございませうかね、戻馬乗らんせんか。」

と早口で車夫は實體。

「はゝはゝ、法性寺入道前の關白太政大臣と言つたら腹を立ちやつた、法性寺入道前の關白太政大臣様と來て居る。」と又アハ、と笑ふ。

「さあ、もし召して下さい。」

と話は極つた筈にして、委細構はず、車夫は取着いて梶棒を差向ける。

小父者、目を据ゑて故と見て、

「ヤレコリヤ車なんぞ、よヲしよし。」

「否、よしではない。」

と其處に一人つくねんと、添竹に、其の枯菊の縫つた、霜の翁は、旅のあはれを、月空に知つた姿で、

「早く車を雇はつしやれ。手荷物があり、勝手知れぬ町の中を、何を當にぶらつかうで。」と口叱言で半ば呟く。

「いや、先づ一つ、（よろしよし）と切出さんと、本文に合はぬてさ。處へ喜多八が口を出して、（せうろく四錢で乗るべいか）馬士が、（そんなら、ようせよせ）と言ひやす、馬がヒイン／＼と嘶ふ。」

「若いもの、其の人に構ふまい。車を早く。川口の湊屋と言ふ旅籠屋へ行くのぢや。」

「えゝ、二臺でござりますね。」

「何んでも構はぬ、私は急ぐに……」と後向きに擱まつて、乗つた雪駄を爪立てながら、蹴込みへ入れた革鞆を跨ぎ、首に掛けた風呂敷包みを外つしもしないで揺つて置く。

「一蓮託生、死なば諸共、捻平待ちやれ。」と、くすく／＼笑つて、小父者も車にしゃんと乗る。……

「湊屋だえ、」

「おいよ。」

で、二臺、月に提灯の灯黄色に、廣場の端へ駆込むと……石高路をがた／＼しながら、板塀の小路、土塀の辻、徑路を縫ふと見えて、寂しい處幾曲り。やがて二階屋が建續き、町幅が綫のやう、月の光を扉で覆うて、兩側の暗い軒に、掛行燈が疎に白く、枯柳に星が亂れて、壁の蒼いのが處々、長い通りの突當りには、火の見の階子が、遠山の霧を破つて、半鐘の形活けるが如し。……火の用心さつさりやせう、金棒の音に夜更けの景色。霜枯時の事ながら、月は格子にあるものを、桑名の妓達は宵寝と見える、寂しい新地へ差掛つた。

輻の下に流るゝ道は、細き水銀の川の如く、柱の黒い家の狀、恰も獺が祭禮をして、白張の地口行燈を掛連ねた、鐵橋を渡るやうである。

爺様の乗つた前の車が、はたと留つた。

あれ聞け……寂寞とした一條廓の、棟瓦にも響き轉げる、轍の音も留まるばかり、灘の浪を川に寄せて、千里の果も同じ水に、筑前の沖の月影を、白銀の絲で手繰つたやうに、星に見めく唄の聲。

博多帶しめ、筑前綾、

田舎の人とは思はれぬ、

歩行く姿が、柳町、

と博多節を流して居る。……つい目の前の軒陰に。……白地の手拭、頬被、すらりと瘦ぎすな男の姿の、軒の其の、うどんと紅で書いた看板の前に、横顔ながら俯向いて、たゞ影法師のやうにイむのがあつた。

捻平はフト車の上から、頸の風呂敷包のまゝ、振向いて、何か背後へ聲を掛けた。……と同時に彌次郎兵衛の車も、丁度其の唄ふ聲を、町の中で引挟んで、がつきと留まつた。が、話の意味は通ぜずに、其のまゝ捻平のが又曳出す……後の車も續いて駈け出す。と二臺が一寸摺れ／＼に成つて、すぐ舊の通り前後に、流るゝやうな月夜の車。

三

お月様が一寸出て松の影、

アラ、ドツコイシヨ、

と沖の浪の月の中へ、颯と、撥を投げたやうに、霜を切つて、唄ひ棄てた。……饅飴屋の門に博多節を弾いたのは、轉進を少々縦に、三味線の手を緩めると、撥を逆手に、其の柄で弾くやうにして、仄のりと、薄赤い、其屋の板障子をすらりと開けた。

「ご免なさいよ。」

頬被りの中の清しい目が、釜から吹出す湯氣の裏へすつきりと、出たのを一目、驚いた顔をしたのは、帳場の端に土間を跨いで、腰掛けながら、うっかり聞惚れて居た亭主で、紺の筒袖にめくら縞の前垂がけ、草色の股引で、尻からげの形、によいと立つて、

「出ないぜえ。」

は、づるいな。……案ずるに我が家の門附を聞徳に、いざ、其の段に成つた處で、件の（出ないぜえ）を極めてこまそ心積りを、唐突に頬被を突込まれて、大分狼狽へたものらしい。尤も居合はした客はなかつた。

門附は、澄まして、背後じめに戸を閉てながら、三味線を斜にすつと入つて、

「あい、親方は出すとも可いのさ。私の方で入るのだから。……ねえ、女房さん、そんなものぢやありませんかね。」

と些と笑聲が交つて聞えた。

女房は、これも現下の博多節に、うっかり氣を取られて、釜前の湯氣に朦として立つて居た。

……浅葱の袴、白い腕を、部厚な釜の蓋に一寸載せたが、圓髻をがつくりさした、色の白い、齒を染めた中年増。此の途端に颯と臉を赤うしたが、竈の前を横ツちよに、かたくと下駄の音で、亭主の膝を斜交ひに、帳場の錢箱へがつちりと手を入れる。

「あゝ、御心配には及びません。」

と門附は物優しく、

「串戯だ、強請んぢやありません。此方が客だよ、客なんですよ。」

細長い土間の一方は、薄汚れた縦に六疊ばかりの市松疊、其處へ上れば坐れるのを、釜に近い、床几の上に、ト足を伸ばして、

「何うもね、寒くつて堪らないから、一杯御馳走に成らうと思つて。えゝ、親方、決して其の御迷惑を掛けるもんぢやありません。」

で、優柔しく頬被りを取つた顔を、唯見ると迷惑處かい、目鼻立ちのきりゝとした、細面の、臉に實は見えるけれども、目の清らかな、眉の濃い、二十八九の人品な兄哥である。

「へゝゝゝ、いや、何うもな、」

と亭主は前へ出て、揉手をしながら、

「しかし、此のお天氣續きで、先づ結構でござりやすよ。」と何も無い、煤けた天井を仰ぎゝ、帳場の上の神棚へ目を外らす。

「お師匠さん、」

女房前垂を一寸撫でて、

「お銚子でございますかい。」と莞爾する。

門附は手拭の上へ撥を置いて、腰へ三味線を小取廻し、内端に片膝を上げながら、床几の上に素足の胡坐。

ト裾を一つ搔込んで、

「早速一合、酒は良いのを。」

「え、もう飛切りのをおつけ申しますよ。」と女房は土間を横歩行き。左側の疊に据ゑた火鉢の中を、邪険に火箸で掻い掘つて、赫と赤く成つた處を、床几の門附へすいと寄せ、

「さあ、まあ、お當りなさりまし。」

「難有え、」

と鐵拐に棲へ引挾んで、ほうと呼吸を一つ長く吐いた。

「世の中にや、こんな炭火があると思ふと、里心が付いて尙ほ寒い。堪らねえ。女房さん、銚子を何うかね、ヤケと言ふ熱燗にしておくんない。些と飲んで、うんと酔はうと云ふ、卑劣な癖が付いてるんだ、お察しものですぜ、え、親方。」

「へ、へ、お方、それ極熱ぢや。」

女房は染めた前齒を美しく、

「あいぐ。」

四

「時に何かね、今此家の前を車を二臺、旅の人を乗せて駈抜けたつけ、此の町を、……」
と干した猪口で門を指して、

「二三町行つた處で、左側の、屋根の大きな家へ着けたのが、蒼く月明りに見えたがね、……彼處は何かい、旅籠屋ですか。」

「湊屋でございませ、なあ、」と女房が、釜の前から亭主を見向く。

「湊屋、湊屋、湊屋。此の土地ぢや、まあ彼處一軒でござりますよ。古い家ぢやが名代で。前には大きな女郎屋ぢやつたのが、旅籠屋に成つたがな、部屋々々も昔風其のまゝな家ぢやに、奥座敷の欄干の外が、海と一所の、大い揖斐の川口ぢや。白帆の船も通りますわ。鱸は刎ねる、鯛は飛ぶ。頓と類のない趣のある家ぢや。處が、時々崖裏の石垣から、獺が這込んで、板廊下や廁に點いた燈を消して、惡戯をするげに言ひます。が、別に可恐い化方はしませぬで。こんな月の良い晩には、庭で鉢叩きをして見せる。……時雨れた夜さは、天保錢一つ使賃で、豆腐を買ひに行くと云ふ。其も旅の衆の愛嬌ぢや言うて、豪い評判の好い旅籠屋ですがな、……お前様、此の

土地はまだ何も知りなさんかい。」

「あい、昨夜初めて此方へ流込んで来たばかりさ。一向方角も何も分らない。月夜も闇の烏さね。」
と俯向いて、一口。

「どれ延びない内、底を一つ温めよう、遣つたり！ ほつ、」

と言つて、目を擦つて面を背けた。

「利く、利く。……恐しい利く唐辛子だ。慍う、親方の前だがね、つい過般も此の手を食つたよ、料簡が悪いのさ。何、上方筋の唐辛子だ、鬼灯の皮が精々だらう。利くものか、と高を括つて、お銭は要らない薬味なり、どしこと井へぶちまけて、松坂で飛上つた。……又遣つたさ、色氣は無えね、涙と涎が一時だ。」と手の甲で引擦る。

女房が銚子のかはり目を、ト掌で爛を當つた。

「お師匠さん、あんたは東の方ですなあ。」

「然うさ、生は東だが、身上は北山さね。」と言ふ時、徳利の底を振つて、垂々と猪口へしたむ。

「で、お前様、湊屋へ泊んなさうと言ふのかな。」

其れだ、と門口で断られう、と亭主は其の段合ませたさうな氣の可い顔色。

「御串戯もんですぜ、泊りは木賃と極つて居まさ。莫塵と笠と草鞋が留守居。壁の破れた處から、